令和6年度大学における文化芸術推進事業・採択一覧表

あいうえお順

番号	大学名	事業名	事業概要	内示額（千円）
1	公立大学法人 大阪公立大学	Equity（公正）& Justice（正義）を軸としたソーシャルアートコーディネーターの人材育成	【概要】 本事業は、Equity（公正）&Justice（正義）、AOP（反抑圧的実践）という観点からアートマネジメント、コーディネーターの人材育成プログラムを実施する点、我が国では先駆的である。大阪公立大学大学院都市経営研究科・文学研究科・人権問題研究センター・都市科学・防災研究センターと大阪市、アートNPO・団体が共同主催する3年計画の事業である。本年度は、昨年度実績、地域でのニーズに鑑み受講生（育成対象者予定者数）を20名から30名とした。 基礎講座→ゼミナール→実践プロジェクト→成果発表→ブックレット・アーカイブ・評価というプログラムで、理論から実践、振り返りへという合理的な流れによって組み立てられている。令和5年度は、基礎講座等理論に重きを置き、プロ主導の実践で、学ぶことに重点を置いた。令和5年度受講生24名のうち19名が継続受講を希望している。令和6年度は、対話形式のレクチャー、ゼミを取り入れつつ、実践にシフトを移し、プロと受講生が協働しながらプロジェクトを実施し、実践力を身につけていく。令和5年度のリサーチ（先進地視察）に替えて、レクチャー、リサーチを組み合わせた双方向のゼミナールを実施する点が、プログラム上の主な変更点である。 令和6年度：【フォーラム】【基礎講座】【ゼミナール】【実践・場づくり】【EJ Café】【EJ 芸術祭】【ブックレット制作】【アーカイブ】【事業評価】 【育成対象】 ソーシャルワーカー[公務員、社会福祉法人・病院職員等]、地域コーディネーター[フリーランス、NPO/団体職員]、研究者、大学院生、アーティスト。アートプロジェクト運営にかかわる実務者[NPO/団体職員、フリーランス、ギャラリー職員等]、自治体・文化財団職員（文化政策、福祉政策等）、美術館・ホール・博物館等の学芸員・職員。いずれも若手あるいはそれぞれの職能の志望者をメインの対象とする。	20,810
2	国立大学法人 大阪大学	「中之島に識を放つⅢ――大学博物館と共創するアート人材育成プログラム」	【概要】 本事業は大阪大学中之島芸術センター、大阪大学大学院人文学研究科と大阪大学総合学術博物館が共同主催する3年計画の事業である。アートマネジメント関連職種や芸術系諸機関での就職を希望する人や既に就職している人を中心に募集し、受講者を30名程度とする。本事業では、拠点となる大阪大学中之島センター近隣の芸術諸機関はもとより、大学近隣の地域社会、また広くアジアやヨーロッパなどから、アーティストと一般市民が集い、多様な生を実現していくためのアート人材を育成する。プログラムには大きく4つの活動のリサーチ・フレームを設定し（「場所のナラティブ」「アートとその分身」「臨床のアート」「日常のポイエティーク」）、それぞれのフレームの中に、レクチャー、リサーチ、ワークショップ、クリエーションという4つのステップを組み込み、それぞれの手法で基礎から応用、そして成果公表まで柔軟に配置する。事業担当者とアーティストなどの講師がそれぞれの枠組みを担当し、その課題に応じたアート・プログラムを推進していく。受講生を、継続3年目の参加者をシニア・フェロー、2年以下の者をジュニア・フェローに分け、それぞれの受講カリキュラムを編成し、各フレームを柔軟に受講できるようにプログラムする。全体を統括するセッションとして、プログラムの冒頭と最後には、オープニング・セミナーとクロージング・シンポジウムを、中盤にはレクチャー・シリーズを行う。これら5つの活動（4つのリサーチ・フレームと統括セッション）を選択必修として履修しかつ最終レポートを提出した受講生には修了証を交付する。近隣の芸術関連諸機関からアドバイザーとして協力を受ける。事務局に特任の職員１名を置く。 【育成対象】 劇場、音楽堂、美術館、博物館など各種文化芸術関連機関で、アートマネジメント関係の仕事に従事している人や今後それらの職種で働きたいと考えている社会人。文化芸術を通じて地域社会に貢献をしたいと考えている社会人。アートを学ぶ学生の受講も歓迎する。	25,650
3	学校法人中村産業学園 九州産業大学	「児童生徒の不登校」「若者のひきこもり」課題解決に向けた社会資源を活用した「メンタルヘルス」支援プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業	【概要】 ①博物館リンクワーカー人材養成（人材養成コース）オンライン講座（博物館などの社会資源を地域とどのようにつなげていくかについて、各地域の事例を学ぶ講座） ②「子ども学芸員」育成プログラム開発（プログラム開発コース）（博物館などが、地域の子ども達の社会的処方の場となるための理論と実践を学ぶ講座） ③博物館のリラックス効果に関する「博物館浴」実証実験（全国の博物館・美術館等の協力を得て、参加者への生理測定、心理測定による効果評価の調査） ④博物館健康ステーション/ミュージアムカフェ事業（地域住民などを対象に、講座修了生が企画立案する博物館浴プログラムを提供し、地域博物館における居場所づくりの実際を紹介する） ⑤海外博物館、美術館などにおける社会的処方、「子ども・若者」のメンタルヘルス支援プログラム及びリンクワーカーの実態調査（海外の先進事例を調査し、今後の方策を検討する） ⑥海外の博物館関係者、リンクワーカーを招聘したオンライン国際シンポジウムの実施（海外事例の紹介、及び国内外の参加者の交流の場） ⑦多言語学習映像資料の制作 ⑧「博物館浴」の理念を紹介する学習映像資料の制作 ⑨事業実績映像の制作 【育成対象】 行政職員、学校関係者、医療・福祉従事者、博物館・図書館関係者、博物館学芸員・図書館司書有資格者（休眠学芸員・休眠司書）、博物館学・図書館学を学ぶ学生、博物館・図書館と健康に関心のある市民、在住外国人など	11,940
4	学校法人　瓜生山学園 京都芸術大学	受け継ぐ、伝える、伝統文化を未来へ生かす実践型アートマネジメント・人材育成プログラム -藍の學校-	【概要】 ●プログラムA【TSUNAGU.US】 工芸・地域・産地＜知識学＞講座 ①＜TSUNAGU.US#1＞過去と現代をつなぐ多様な分野のコミュニケーターのオンラインレクチャー　講座テーマ「伝える・つながる・受け継ぐ」 ②＜TSUNAGU.US#2＞「JAPAN BLUE―藍について―」講演会・東アジア地域の藍文化を通して、地域・民族との繋がりを其々の視点から。 ●プログラムB【Study room 】工芸の産地＜実践学・フィールドワーク＞講座・テーマ：産地と伝統工芸・沖縄 ①Study room＃産地と手わざ 『産地で学び・色を繋ぐ』琉球藍 ②Study room＃未来へ伝える 『見つめる眼・伝える言葉―見つめ、受け取り、伝えること―』写真・文章 ③Study room＃素材・表現を探る『藍生かし直し―漆と藍の融合―』 琉球藍・漆・紅型・西陣織 ●プログラムC【感覚のレッスン】原点の手触り＜材料学＞講座 ①自然から五感を学ぶ＜藍を種から育成し、生育過程を記録＞ ②テーマ「自然と共に」レクチャー「藍」「農と芸」などの視点から ●プログラムD【展覧会】『GO/OD展＃1-藍の學校-（仮）』の開催。プログラムB、Cの成果を広く展示する。 【育成対象】 伝統工芸作家・芸術家・芸術系メディア（書籍・webメディアなど）編集者・教育関係者・大学教員をはじめとした研究者・自治体・企業の芸術企画担当者・文化施設担当者・一般市民・大学生・美術館・博物館の学芸員	17,860
5	公立大学法人 京都市立芸術大学	共生と分有のトポス～芸術と社会の交差領域におけるメディエーター育成事業	【概要】 本事業では、地域・大学・芸術の関係について積み重ねられてきた調停から現れる複雑な関係について思考を重ねる3つの活動を軸に進めます。 【テーマ　環境：活動-1　聞くこと～東九条の再開発のなかで】 「活動 ①」では、 地域に根付く独自の文化や暮らしに着目する。土地の歴史をめぐるフィールドワーク、オープンダイアローグ、マダン、アクティヴィズム、福祉、演劇など、互いに近接するさまざま領域におけるリサーチ方法を学び、 将来へと受け継ぐべき記憶と課題を探り、分断を越えて人びとのつながりが創出される場をデザインします。 【テーマ　ケア：活動-2　物語ること～地域文化の再発明】 「活動 ②」では再開発によって変化していく地域の問題を共有し、地域文化を再解釈、再発明していく語り方を開発する。講師には、保育士、キュレーター、カフェ経営者、 政治学者、 演出家、社会学者など多様な領域の専門家を招き、レクチャーを通して、地域社会への実践的なアプローチの技術を共有します。 【テーマ　公共空間：活動-3　状況の再構築～何が共有され、何が失われていくのか】 「活動 ③」では、二つのリサーチ（活動 ①「聞くこと」と活動②「物語ること」）を基盤に、再開発によって急激に変化していく東九条の中で、実際にその風景のなかに出向き、介入する。それは古い課題に新しい光を当てることでもあり、自明に思われることにもう一度目を向けることでもあり、あるいはアートを再び社会の中に再配置する行為でもあります。 【育成対象】 アートマネジメントを目指す大学院生や社会人、行政の文化政策やまちづくり担当者、社会との関わりに意欲をもつアーティスト、開かれた美術館のあり方を模索する学芸員、創造性を活用した教育を目指す教員や教育学部の大学院生、コミュニティーアーカイブの作成を目指す市民	11,530
6	学校法人 東京音楽大学	伝承を担うフィールドからまなび、ともにつくり、地域へつなぐアートマネジメント人材育成ー伝統音楽・芸能の地域レガシーによる新たな価値創出を目指してー	【概要】 ■Ⅲ「フィールドと地域をつなぐ」をテーマとする。「フィールドと地域をつなぐ」にあたり、令和6年度の活動で想定する「フィールド」は、前年度（令和5年度）に引き続き、a)伝統音楽・芸能を伝承する個人・組織やそれを支える地域コミュニティを含む「伝承を担い未来につなげるフィールド（伝承を担うフィールド）」と、新たに、b)文化芸術基本法にも有機的な連携が図られるべきと明示されている福祉や教育、多文化共生等の「連携し多様な実践を展開するフィールド（実践を展開するフィールド）」の2つである。 ■伝統音楽・芸能に係るアートマネジメント人材育成には、これら2つのフィールドを知り、両者を繋いでいくとともに、フィールドと社会をつなげ、社会への発信や交流についてフィールドからの相談にも応じられる「コーディネーター」の役割が求められる。令和6年度は2つのフィールドを、a) 伝承を担うフィールドは祭囃子、三匹獅子舞、インド音楽に、b)実践を展開するフィールドは地域福祉、文化財保護・生涯学習・文化芸術振興、移民コミュニティ支援・国際交流に絞り込み、さらにそれらをつなげる先として、「地域」を設定する。伝統音楽・芸能を各地の地域レガシーと捉えつつ、「コーディネーター」としての実践力を、地域の課題解決の視点から活かしていくことができる人材の育成を目標とする。 ■具体的活動は以下のとおりである。 ①基礎講座では（1）政策・制度的な枠組みを学ぶための講座、（2）地域における実践例を学ぶための講座、（3）地域伝統芸能の伝承コミュニティの課題と地域における多様な実践をテーマとしたラウンドテーブルを実施する。 ②企画制作研修では、a)とb)のフィールドを組み合わせて、それぞれ異なる地域で企画を実践していくプロジェクトを3つ立ち上げる。 ■あわせて3ヶ年の集大成として、以下の活動を展開する。 ③3ヶ年の基礎講座・実践セミナー・企画制作研修の内容をまとめた『フィールドからまなび、ともにつくり、地域へつなぐためのアートマネジメントハンドブック』を作成する ④3ヶ年の事業報告と企画制作研修の成果と課題を検討するシンポジウム等を内容とする「フィールドからまなび、ともにつくり、地域へつなぐためのアートマネジメント人材育成総括シンポジウム」を開催する。 【育成対象】 政府・自治体等の各担当者（芸術文化企画・文化財保護・国際交流・地域振興・学校教育・生涯学習・福祉）、文化施設関係者、伝統音楽・伝統芸能団体関係者、学校教育関係者、演奏者・演奏団体関係者、アートマネジメントに従事している者又は志す者、当該地域の音楽・芸能を生かした地域創生等に関心がある一般居住者等	20,100

7	国立大学法人東京藝術大学 (国際芸術創造研究科)	「すみだ川アートラウンド」～ ARTs×SDGsでつながる 隅田川流域の民間組織コレクティブ化構想	【概要】 (1) すみだ川アートラウンドテーブル ARTs×SDGsをテーマにした領域横断的な取り組みを実現するための議論と事業の実施。 (2) すみだ川アートラウンド・プラクティス 隅田川流域7区内のアートNPOのコレクティブ化構想の実現を目指す。 (3) すみだ川アートラウンド・ハブ 隅田川流域で活動する官/民の交流の場を設ける。 (4) 成果報告書作成 3年間の成果を報告書の形式にまとめて公開する。 【育成対象】 アートNPO関係者、アーティスト、企業や行政(外郭団体を含む)の職員、大学生や文化ボランティア経験者、市民など。	13,420
8	学校法人 東北芸術工科大学	温泉地を舞台にした持続可能な「アート＆ウェルビーイング」人材育成プログラム	【概要】 ①総合キュレーション（アート作品等の温泉地へのインストール）②アールブリュット（障害者アート）③エキシビション（展覧会企画運営）④ツーリズム（ツーリズムの企画・プロモーション）、以上4つの実践的講座・展示等を実施する。過去の山形ビエンナーレで展開された豊富なコンテンツ資源や継続中のプロジェクトをリソースとしながら、令和6年9月開催に向けて開発中の「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2024ーいのちをうたう（仮）ー」とも連携しながら、プログラムを展開する。成果物は、「山形ビエンナーレ2024」での会場（蔵王温泉街、東北芸術工科大学）で発表する。 【育成対象】 美術館・博物館・ホール・図書館等の公共施設・文化施設の職員、自治体の文化芸術・生涯教育・地域振興等担当職員、学校教職員、アーティスト・デザイナー・建築家・工芸作家・編集者・ライター等のクリエイター、広告・イベント・制作等企業の担当者、商店街組合・協議会・商工関係・不動産・店舗等の経営者・個人事業主、保健・医療・福祉関係者、まちづくりや文化芸術活動に関心のある市民・学生など	20,470
9	国立大学法人奈良国立大学機構　奈良女子大学	クロスリアリティ時代に求められる「リアル」「バーチャル」往還型アートコミュニケーション人材育成事業	【概要】 令和5年度の事業枠組みを踏襲するほか、新たに【プロジェクト】を開始する。 1.【講座・ワークショップ】1回3時間程度の講座、またはワークショップを計8回実施する。講師は【アーティスト・イン・レジデンス】招聘アーティストや過去に事業に参画したアーティスト等が担当する。実施にあたっては、講師からの一方的な知識享受にならず育成対象者も主体的に参加できる取組となるよう、また、現実（リアル）と仮想（バーチャル）の両面を扱う内容となるように留意頂く。 2.【アーティスト・イン・レジデンス】新進のアーティストを奈良に招聘し、大学が有するNWU奈良会館等を拠点に作品制作をさせる。令和5年度は2アーティストを招聘し、両アーティストとも1週間程度の滞在を複数回実施する細切れ滞在であったところを1月以上のまとまった時間で滞在頂く形に改め、より濃密な滞在制作とする。 3.【プロジェクト】アートマネジメント人材としての実践知を得させる機会として以下のPBL型アートプロジェクトを実施する。 ①アートリペア…入江泰吉作品のフィルムの退色劣化は写真芸術の保存に共通する課題である。写真を美しい状態で後の世に継承するモデル事業として育成対象者と美術館技術員との協働により入江泰吉作品の色補正とデジタル化を推進する。 ②アートエデュケーション…美術館が無い地域の方にも美術に触れる機会を提供すること、これからの美術を支える児童生徒に美術に触れるきっかけを提供することは美術館や高等教育機関に課せられた責務である。奈良女子大学・奈良教育大学と入江泰吉記念奈良市写真美術館は令和5年度文化庁「InnovateMUSEUM事業」として出張美術館事業を実施したが、令和6年度にも美術館がない地域や児童生徒達にリアル・バーチャルに芸術を届ける事業として出張美術館事業を継続し、アート鑑賞者の裾野を拡げる。 ③アートプロモーション…より多くの方に美術館に足を運んでもらうためには、ポスターやロコミ等の従来型の周知に加え、SNSやVR等の情報・IT技術の利活用が不可欠である。育成対象者と美術館、アーティストが協働し、新たなアートプロモーションの方法論を検討する機会を設け、アートの社会への発信を進める。また、プレスリリース等マスコミやウェブを通じた広報についても実務家を講師に招聘して研修を行う。 4.【展覧会】アートに関する諸活動の終着点は鑑賞者を得、評価を受けることにあると考え、上記1．2．3．の成果や効果を検証する場として令和6年12月よりとか月間、入江泰吉記念奈良市写真美術館、メタバース奈良市写真美術館を用いて現実（リアル）と仮想（バーチャル）双方の美術館を開催する。展覧会実施には育成対象者・アーティストとも当事者として参画・協働し、アートコミュニケーターとしての実践知を身に付けさせる。本取組は実践的・先進的な博物館実習である。 【育成対象】 奈良女子大学・奈良教育大学を始めとする大学生・院生、奈良県内自治体・美術館・文化施設等職員、現役アーティスト	15,780
10	国立大学法人　北海道大学	ミュージアムにおける異分野との「対話」と「寄り添い」を通じた人材育成事業	【概要】 本事業の1年目（令和4年度）では、「ミュージアムをめぐる対話（ANALYSIS）」と題し、各分野の専門家との対話を重ねることで、ミュージアムを取り巻く社会的な状況と課題について育成対象者とともに考えた。2年目（令和5年度）は、「ケーススタディを通じた寄り添い（INSIGHT）」と題し、実例に学ぶケーススタディを通じて、人や地域の課題にアプローチするミュージアムの力を再考した。これらの活動を受けて最終年度にあたる令和6年度は、「人と情報のネットワーク化・資源化（OUTCOME）」をキーワードに活動を行っていく。特に力を入れていくのは、人や情報を軸としながらミュージアムの専門性を捉え直し、ミュージアムならではの方法で人や地域に貢献する道筋を育成対象者とともに掘り下げること、並びに事業成果を資源として社会に発信していくことである。 活動①「キックオフシンポジウム」、活動⑧「レクチャー＋シンポジウム」では、異分野の専門家と対話してきた本事業での経験を踏まえつつ、専門知を編集し伝達するミュージアムの力を改めて学ぶ。「となりのしばふシリーズ」と題した活動③～⑤では、図書館、動物園、水族館など、ミュージアムの隣接領域の専門家との対話からミュージアムならではの専門性の輪郭を再検討したり、具体的な事例に即しながら社会との関わり方を学んだりすることが目指される。活動⑥と⑦は、これまではミュージアムに関する発言をする機会が少なかった人たちの声から積極的に学ぶことで、新たな課題を創造的に発見し合うというものである。活動②では、本事業の3年間の成果を社会に向けて発信するべく、動画コンテンツやレポート類のアーカイブ化を行う。最後の活動⑨では、事業全体の総括も兼ねて、「つづける」「おりる」という観点からミュージアムの活動について議論する。ミュージアムの総数が減少し始め、人口の減少や地域の縮小が問題になるなかでの新たなミュージアム論を前向きに議論してみることが本シンポジウムの目標である。 【育成対象】 ・社会教育系専門職（ミュージアム学芸員を中心に、司書、アーカイヴィストなど） ・文化施設系専門職（ホール・劇場の担当者、制作者、プロデューサーなど） ・自治体職員（文化政策、文化施設、観光政策の担当者など） ・NPO職員（公共文化施設の指定管理者、業務受注組織のスタッフなど）	8,740
11	公立大学法人 横浜市立大学	地域社会と連携した創造都市マネジメント推進人材育成プログラム	【概要】 申請者である横浜市立大学が、横浜国立大学及び神奈川大学、横浜市、横浜市内で活動するNPOなどと連携して、以下のプログラムを実施する。 ①創造都市スクール：創造都市政策に取り組む自治体職員、その担い手となるNPOスタッフ、大学院生等を対象に開講し、創造都市に関するシリーズレクチャーを実施する。一定数以上のレクチャーに参加した受講者に対しては、創造都市スクール修了証を授与する。レクチャーはオンラインで配信し、アーカイブ化を行う。 ②創造都市リサーチ：国内外で展開されている創造都市の取組に関してリサーチを実施する。また、このリサーチの成果を活かして令和7年度以降の研修プログラムのコンテンツ作成を行うとともに政策評価手法の検討を行う。 ③アーカイブ・プロジェクト：市内で活動するNPOなどの創造都市推進団体（BankART1929、黄金町エリアマネジメントセンター、象の鼻テラスなど）と協働し、これまでの横浜市内を中心とした取り組みについてのアーカイブを作成する。プロジェクトの実施にあたっては、創造都市スクールのメンバーが参加し、能動的学修の機会とする。 ④シンポジウム・情報発信：令和6年に開催されるの横浜トリエンナーレの連携イベントとして創造都市に関するシンポジウムを開催する。 【育成対象】 自治体政策担当者、地域でアートプロジェクトを実施するNPOなどの団体スタッフ	10,840
12	学校法人　早稲田大学	舞台公演記録のアーカイブ化のためのモデル形成事業	【概要】 令和5年度までの講座において、本事業では舞台芸術アーカイブのための様々な知識を提供し、舞台公演記録および関連資料をアーカイブするための各種処理をこなし、将来的に収益力に結び付けることのできる人材育成に尽力してきた。今年度は、これまで本講座で提供してきた知識や本事業で作成した補助教材を元に、育成対象者が自立してアーカイブの知識を使いこなし、率先してアーカイブ活動をおこなうことのできるよう、これまでの外部評価者による評価を参考に連続講座を設計する。令和4年度の講座を「基礎編」、令和5年度を「実践編」、今年度は「発展編」とし、具体的で実践的な内容に特化した講座開設を目指すとともに、今年度は育成対象者が「自立して」アーカイブ活動をおこなえるようになることを目標に、ワークショップを全4回に増やす。講座の概観を一望できるような、舞台芸術アーカイブの考え方について問う講座に始まり、補助教材である「アーカイブガイドブック」の使い方から、様々な立場で舞台芸術アーカイブの実践に携わる講師陣の具体的な事例を学ぶ全6回の座学講座を実施後、全4回のワークショップを実施する。ワークショップでは、専門的な知見を持つアドバイザーやワークショップ専門のファシリテーターとともに、「アーカイブガイドブック」を使いながら、アーカイブ活動のロールプレイングをおこなう。これらの成果をハンドブックにまとめ、令和6年度版『DONUTS BOOK』を作成する。これらの事業を実施することによって、具体的な事例をさらに学びながら、昨年までの本講座で得た知識を使いこなし、率先してアーカイブ活動に着手できるようにし、ハンドブックや「アーカイブガイドブック」などの補助教材を使いながら、舞台芸術アーカイブを牽引できる人材を育成する。さらに、3年事業の締めくくりとして、シンポジウムを開催し、本事業の育成成果を公共の知的財産として広く共有し、舞台芸術および舞台芸術アーカイブの一般の人々への周知にも寄与する。 【育成対象】 演劇・舞踊・伝統芸能等舞台芸術の劇団や劇場、公演団体等のスタッフ・創作者、文化施設やアーカイブ機関、自治体の実務者を主たる対象とするが、大学で演劇や映像、アートマネジメントを学ぶ／学んだ学生、舞台芸術の研究者など舞台芸術アーカイブに興味を持つすべての人に門戸を開く。継続的な人材育成のため、今年度の対象者は令和4年度・令和5年度の講座の内容を理解していることを前提とし、未受講者には事前にハンドブックを配布し、さらに今年度は令和4年度・令和5年度のアーカイブ動画をまとめた補助教材を提供し、自主学習を促すことによりキャッチアップをはかる。	10,900

【令和6年度応募・採択状況】	
応募件数	22件
採択件数	12件
採択率	54.5%
合計	188,040千円

令和６年度
大学における文化芸術推進事業
協力者会議委員一覧

柴辻　純子	音楽評論家
渋谷　拓	金沢美術工芸大学　教授
間瀬　勝一	公益社団法人全国公立文化施設協会　事業課長
毛利　直子	高松市美術館　主任主事
渡邉　哲意	宝塚大学東京メディア芸術学部　教授

（五十音順・敬称略）